

(平成30年8月27日)

赤松小三郎研究会 講演会 のご報告

今回は猛暑の中、日本教育会館で85名が参加のもと、講師に地域史研究家で元長野県立歴史館専門員、生涯学習団体上田社会教育大学講師の尾崎行也氏をお迎えして講演会を開いた。

日時 : 平成30年8月5日(日) 14:00～16:20
場所 : 日本教育会館 9階 喜山倶楽部
出席者 : 85名(同窓生50名、一般31名、当日参加4名)

◎演題：『赤松小三郎と幕末上田藩』

～信濃国上田藩(藤井松平氏忠晴系5万3千石、宝永3年～明治4年)の幕末期における藩政動向と、藩士赤松小三郎の句「家柄は言ふな雪解の黒濁り」をめぐって～

◎講師：尾崎行也 氏

<配布資料>

1. 本講演のレジメ～「赤松小三郎と幕末上田藩」(尾崎行也氏作成)
2. 「赤松小三郎研究会」この1年の活動概要
3. 「赤松小三郎研究会」入会のご案内



<内容>

- 赤松小三郎研究会 会長 滝澤進より挨拶
- 同研究会 事務局長 小山平六より講師 尾崎行也氏の紹介
- 同研究会 事務局 荻原貴が司会

○講演要旨

1. 上田藩松平氏について

・近世の上田と言えば真田氏が有名だが、実際の統治期間は、真田氏が約40年間、次の仙石氏が約80年間、最後の松平氏が約160年間。幕末の上田藩士であった赤松小三郎を語るには、上田藩松平氏についての理解が欠かせない。

・上田藩松平氏は、三河の藤井松平氏忠晴系。3代忠周（ただちか・初代忠晴の次男）が宝永3（1706）年に初代上田藩主（5万8千石）となる。忠周は5代将軍徳川綱吉に気に入られ京都所司代を経て後に老中まで務める。3代藩主忠順（ただより）の時（宝暦11年・1761年）、領内大一揆（宝暦騒動）が起きる。この騒動を治めるのに岡部九郎兵衛（三代目）が活躍した。5代藩主忠学（たださと）の時（文化10年・1813年）、藩校「明倫堂」が設立される。6代藩主忠優（ただます）は姫路藩酒井家から養子に入った。水野忠邦に憧れを持ちとても優秀で大坂城代を経て嘉永元（1848）年に老中に就任する。ペリー来襲し、日米和親条約締結に尽力するも老中を罷免されるが、安政4（1857）年、老中に再任される。この時忠優から忠固（ただかた）と改名。翌安政5（1858）年、日米修好通商条約の無勅許調印の責任を取らされる格好で大老井伊直弼より老中を罷免され、翌年急死する。

2. 幕末上田藩の農村について

・忠優の時代、上田藩は極度の財政難で農村の暮らしも苦しかった。忠濟、忠学の2代にわたり藩政を切り盛りした松平凶書（づしよ）が失脚した後に藩政を主導した国（上田）家老は藤井右膳（うぜん）で、藩の財政を立て直すために農村改革を実施した。郡（こおり）奉行の下で実際に農村を指導したのは代官・郷手代など（実務官僚）。代官は地方調役（じかたしらべやく〜困っている地域の実態を調べて耕作を進言し実行させる）や郷手代（ごうてだい〜こまごました地域の仕事を担当）に足軽上がりの者を積極起用するなど、従来の藩の格式にとらわれない人材登用も行った。

・当時の農民はしたたかだった。生活が苦しいと盛んにお救い米の請求をしたり、耕作地が無くて米を作れない者は蚕の種（卵）を生産した。天保年間の上田地方の蚕種の生産・品質は共に日本一だった。塩尻では風通しが良い河原で桑を栽培したため桑の葉にハエが卵を産むことが少なく、ウジ虫による蚕種の病気が少なかったからだ。

3. 幕末上田藩の政争について

・藤井右膳は、忠優が大坂城代の時、忠優にしたがって大坂に行き、西洋流の軍事改革の必要性を感じるに至った。

・忠優は江戸家老（岡部九郎兵衛）と国家老（藤井右膳）を使い分けた。藤井右膳（藤井派）が国元で藩政改革（人材登用・軍制改革・農村改革）を主導する中で、忠優が老中を務めるがために江戸で多額のいわゆる政治資金を工面する必要がある岡部九郎兵衛（岡部派）との間で対立が起きる。両派は目付を使って互いに相手の不正等を探った。岡部派は目付の他に探索方（たんさくがた）という私的な目付も使った。最終的には国家老の藤井派が敗れる。その後忠優が亡くなると、忠優の後ろ盾が無くなった岡部派と、かつては藤井派と岡部派の中間派だった師岡派との間に争いが起きる。争いは慶応3年まで続く。

・我々は歴史から何を学ぶべきか。「如何に人間は愚かで、そのために大きな犠牲を払った

かを知り、その過ちを繰り返さないことを学ぶ」ということではないか。しかし、人間は人間的本能（例えば権力欲）に負けてしまうために過ちを繰り返してしまう。

・このように幕末の上田藩は嘉永から幕末に至るまで政争に明け暮れたため、優秀な人材を生み出す余地が無かったといえる。しかし、別の見方をすれば、藩校（明倫堂）を設立したことにより教育が進み、そこで学んだ多くの藩士が（赤松小三郎以外にも）上田に留まらずに江戸へ出たり、水戸など当時の有力な世論を興している諸藩を訪ねて学んだ。

4. 上田藩（松平氏時代）の武士階級（人材登用制度）について

・ここからは、赤松小三郎が生まれた芦田家と養子先の赤松家について詳しくみていく。

江戸時代はがんじがらめの家柄の時代であり、どういう家筋（家柄）であったのかを知ることが、大変重要である。

・両家を知る上で、当時の上田藩の武士階級（人材登用制度）について押さえておくと次のようになる。

・基本的には一家で一人（主～あるじ）しか藩に勤めることができない。定年がないので主が亡くなると跡取り（通常は長男）がやっと家督を継ぐ。一般的に家督を継いだ時点での俸禄は生前の主（親）の約8割でスタートする。跡取りは、主が存命中にも若手採用枠として藩に勤めることができた。しかし、跡取り以外の者は若手採用もないし家督を継ぐこともないので、他家へ養子に行くしかなかった。分家が許されるのは例外中の例外。家督を継ぎ真面目に勤めていればある程度の昇進はあった。

【講演の中では上田藩士（松平家家臣）の格禄賞罰の記録「明細」（現在、上田市立博物館に十数冊保管されている）から、芦田家と赤松家について詳細な説明があった。

以下5. 6. では各代、①召出・取立（採用）又は跡式（家督相続）の時期及びその時の格式・役職と俸禄、②最高または最終の格式・役職と俸禄 を中心に抜粋した。格式・役職は、別紙「天保10年格式・人数・役職一覧」（上田市史より）参照】

5. 上田藩 芦田家 略譜（赤松小三郎の生家）

・初代、市兵衛・・・（藤井松平忠晴系2代忠昭の頃）丹波亀山で召出、その年月と格式は不明

・2代目、（次男）平七・・・宝永6（1709）年櫛番、納戸（3代忠周＝初代上田藩主は宝永3年に上田へ移封）

・3代目、（養子）勘兵衛・・・享保20年跡式（相続）、7石2人扶持

・4代目、和太右衛門・・・寛延3年取立、延宝元年徒士格（かちかく）並

・5代目、（養子）清右衛門・・・寛保元年跡式・7石2人扶持 宝暦7年組外徒士格 寛政2年中小姓・御錠口番、9石3人扶持

・6代目、安弥（後、清右衛門）・・・寛政元年召出、2人扶持、組外徒士・勘定方 享和

元年跡式、7石3人扶持 文政3年給人席、10石3人扶持

- ・7代目、弥一郎（後、勘兵衛＝小三郎の実父）・・・文政元年召出、2人扶持、組外徒士格 文政3年藩校教授手伝（助教授）同年詰並 文政3年親の昇進（給人席）に伴い1人扶持加増・中小姓 天保2年句読師 天保8年跡式、10石3人扶持 天保10年改名勘兵衛（安政元年清次郎、赤松家へ養子） 安政6年12石3人扶持 慶応2年4月病死
- ・8代目、柔太郎（小三郎の兄）・・・弘化4年召出、2人扶持・組外徒士格 嘉永2年藩校教授 安政4年詰並・句読師助 安政7年藩校会読頭取 元治2年洋書調方頭取 慶応3年3月中之間席 慶応3年8月岡部九郎兵衛一件で役職免、広間番入り（30日間） 慶応4年6月軍事物方

・このように、芦田家は出発点もあいまいで決して恵まれておらず、出世も望めなかった。（同家歴代で、最高の格式は6代目安弥の給人席、最高の俸禄は7代目勘兵衛の12石3人扶持）

6. 上田藩 赤松家 略譜（赤松小三郎が養子に入った家）

- ・上田藩「明細」には「広瀬家」として記録されている。後に5代目小平太（小三郎の養父）が天保4（1831）年2月に赤松弘と改名して赤松家となる。
- ・初代、猪左衛門・・・延宝6年（藤井松平忠晴が亀山藩主の頃）召出、中小姓格（ある書物では馬術師範だったという記録あり）
- ・2代目、（養子）金五郎・・・元禄元年召出 宝永7（1710）年中小姓 同17（？）年代官 享保4年武具奉行
- ・3代目、平左衛門・・・享保8年跡式、12石3人扶持、中小姓 元文2年蔵奉行 寛延2年代官 宝暦11年14石3人扶持
- ・4代目、巨助・・・明和2年跡式、10石3人扶持、組外徒士格 寛政3年中小姓 寛政5年定府（江戸勤め） 文化8年12石3人扶持
- ・5代目、（養子）小平太（小三郎の養父）・・・文化13年召出、2人扶持、組外徒士格 文政元年追手番所一件、叱り、追込10日目免 文政5年身持不行跡、徒士目付取上、追込（30日）、同7年身持之不相濟儀、急度叱り、組外末席追込、30日目免 同11年養父跡式、10石3人扶持 天保4年改名「赤松弘」（以降、赤松家） 弘化2年家事不取締、叱り 弘化5年12石3人扶持 嘉永3年倅（せがれ）善斎叱り、慎中不埒扶持給取上、其方方江差戻、慎、7日目免（安政元年芦田清次郎養子に入る） 安政2年娘出奔、慎、5日目免 安政5年詰並
- ・6代目、（養子）赤松清次郎 後小三郎・・・安政元年養子 安政2年召出、2人扶持、組付徒士 万延元年養父跡式、10石3人扶持 万延2年組外徒士格 万延2年10月改名小三郎 文久2年戊正月詰並 同年7月調練取調べ御用掛り 文久2年西洋流調

練稽古の世話 文久3年亥正月大小銃並びに器械製造掛り 文久4年11石3人扶持
慶応3年9月3日京地に於て変死致し候に付き、御大法の通り家断絶仰せ付けられ候間、
家族早々引払ひ候様取り計らふ。

・赤松家も、芦田家と同様で恵まれておらず、小三郎が養子に入ったときの俸禄は、赤松家が12石3人扶持、芦田家が10石3人扶持で、両家の格式はほぼ同格であった。

また、赤松家は小三郎が養子に入る前後にいろいろ問題があった。養父の倅（茶坊主・侍の身分ではない）が慎中不埒扶持給取上の上、父の預かりとなったり、娘の出奔（家出）があった。

7. 「塵塚」～小三郎詩文集より～

・「塵塚」（ちりづか）とは、小三郎が安政7年（万延元年、1860年）咸臨丸による渡米に参加できず、上田に帰って赤松家を相続した当時を詠んだ俳句や漢詩を書き綴ったもの。小三郎の心境を良く表しているという意味で大変重要なもの。

・ここでは4句を紹介する。①②は咸臨丸で渡米できなかった悔しさを詠ったもの。③④は自分が低い身分でどうにもならないもどかしさを詠ったもの。

① 異国（とつくに）の風に齒をかむ柳哉（かな）

② 春風や東に霞む船二ツ

③ 家柄は言ふな雪解（ゆきげ）の黒濁り

自分が藩の外へ出ていけば当初はあまり家柄のことは問われないが、そのうち名が知れてくると低い家柄が分かってしまう。しかし自分にはどうすることもできない。

④ あの雲によもや届かじ揚げ雲雀（あげひばり）

自分が雲雀になって飛んで行ってもあの雲には届かない→自分がどんなに背伸びをしても皆から羨まれるような立場にはなれない

・このように、赤松小三郎は低い家柄の次男に生まれたがために、同じような家柄の家に養子に行くしかなかった。そして、どんなに優秀でも上田藩の中では出世は望めず、また、藩主宛に二度出した意見書も全く採用されなかったし、逆に身分の低い者が意見書を出すとは何事だと罵倒された。最期は京で志半ばで暗殺されたたこともあり悲劇の人物として捉えられている。

・しかし、見方を変えると、小三郎は江戸や長崎で勉強する機会を与えられて、自らも努力をして新しい知識を身に付けて、羽ばたくことができた。

一方上田藩には小三郎と同じような格式の武士が大勢いて、その大多数は小三郎のような活躍はできなかったし、小三郎よりもっと芽が出なかった武士も大勢いた。

つまり小三郎は悲劇の人物と言うよりは、それなりに成功した人物である、と思わざるを得ない。そして上田藩には小三郎とは別の道を歩いて藩に奉公し、明治になっても活躍した人物もいるので、そうした人々も併せて見ることによって赤松小三郎をもう一度見直すべきである。

・これは、歴史は幅広く多面的に見ることが必要であることに通じる。それには当時の上田

藩の武士社会（政争、格式に捉われた事実、更には新しい時代を迎えて藩校を作り藩校出身者を用いざるを得なくなっていく社会情勢、等）を併せて見ていくと一層理解が深まると考える。

以上

<講演終了後の質疑応答より～抜粋～>

1. 質問～上田藩での上級武士・中級武士・下級武士 とは格式ではどこを指すか？

答え～・上級武士：家老～奏者番 辺り

・中級武士：留守居～徒士部屋頭 辺り

・下級武士：組外徒士（くみがいかち）と組付徒士（くみつきかち）

また、組付徒士までが士分（侍）で、以下の隠居～目見済嫡子は現役の家中ではない。足軽、中間（ちゅうげん）は士分ではなく、その下の身分となる。

2. 質問～格式の売買はあったか？

答え～幕臣はあったが上田藩では無かった。身分の低い徒士格や足軽などは豪商などから融資を受けるために豪商から嫁をもらうことがあった。豪商・豪農は士分や足軽と親戚となることは一種の名誉（格式が上がる）であった。

3. 質問～下級武士の生活レベルはどんな感じだったか？

答え～・現代人と比べるとは難しい、非常に貧しかったとしか言えない。上田藩の一例では、町人と付き合っていた下級武士が、町人の妾を下級武士の家に預かっていたという記録がある。妾に会いに来る町人から飲食物の御裾分けをいただいていた、そこまで落ちぶれていた、ということ。

・足軽は長屋住まい、六畳二間と流し、トイレ（雪隠）は長屋に一つ、日当たり悪い

・徒士（かち）は割り屋住まい、足軽の長屋よりは少し広いがいわゆる二間長屋

4. 質問～農村の有力者について

答え～農村の有力者（まとめ役）は藩と良好な関係を保ちながら村を治めるために藩の役人と接待を行うなどして上手く付き合う必要があった。そのため村方と関わりがある藩の役人はそれなりに収入があった。

<参考>

1石 = 10斗 = 100升 = 1,000合 = 2.5俵

(1俵 = 4斗 = 60kg、1合 = 150g)

1人扶持 (いちにんぶち) = 1日当たり玄米5合

(報告者)

赤松小三郎研究会事務局

荻原 貴 (79期)



滝澤会長による開会挨拶



尾崎先生との質疑応答風景

天保10年格式・人数・役職一覧

| 格 式 | 人数 | 役 職 の 例 |
|----------------|------|----------------------------------|
| 家老(並) | 4 | (家老) |
| 中老 | 2 | 側用人・旧記掛・馬奉行 |
| 用人(格・末席) | 11 | (用人)・側用人・学校惣司 |
| 大寄合〔席〕 | 6 | 用人・側用人・旗奉行 |
| 物頭(格) | 9 | (物頭)・町奉行・寺社 役押合 |
| 側頭(格) | 12 | 取次・奏者番・寺社役 同心支配 |
| 奏者番(格) | 6 | 鉄碗組・弓組・徒士頭 |
| 留守居 | 1 | (留守居) |
| 町奉行 | 0 | (町奉行) |
| 郡奉行 | 2 | (郡奉行) |
| 徒士頭(格) | 13 | (徒士頭)・箆箆奉行・ 勘定奉行 |
| 目付〔席〕 | 0 | <下記> |
| 手廻頭 | 2 | (手廻頭)・供頭 |
| 供頭 | 1 | (供頭) |
| 普請奉行 | 0 | (普請奉行) |
| 勘定奉行 | 3 | (勘定奉行)・取次 |
| 箆箆奉行 | 0 | (箆箆奉行) |
| 独礼〔席〕 | 9 | 取次・右筆・納戸頭取 |
| 寄合〔席〕 | 3 | 納戸・側勤 |
| 給人(元馬廻) 〔席〕 | 94 | 納戸・盗賊改役・宗門改 役・側勤・代官・帳元 |
| 納戸 | 3 | 納戸・手留方・刀番 |
| 側勤 | 12 | (側勤)・手留方・大殿付 |
| 奥医師 | 6 | (奥医師) |
| 表医師(並) | 16 | (表医師) |
| 中之間〔席〕 | 19 | 書物方・句読師・鎗術師範 |
| 中小姓 | 72 | 句読師・代官・劍術師 範・山林川除・右筆・ 料理人 |
| 詰並 | 50 | 鍵役・賄・帳元定助・ 右筆・川除方・金方 |
| 徒士小頭 | 1 | (徒士小頭) |
| 徒士目付 | 19 | (徒士目付)・小検使・ 山林方 |
| 徒士部屋頭 | 7 | (徒士部屋頭)・鎮守掛 |
| 組外徒士〔格〕 | 82 | 勘定方・作事元弘・書 役・納戸下役・廻米 方・湯殿方 |
| 組付徒士 | 19 | 書役・奉礼書・居業生 |
| 隠居 | (21) | |
| 幼年 | (5) | |
| 目付 | 13 | (目付)・勝手 |
| 目見濟嫡子 | (37) | (内18人 徒士格) |
| 計 | 497 | |

・格式欄、() は本席以外、〔 〕 はそれのみ。

・人数欄、() は除いて計を出した。

・役職欄、() は記述はないが当然あった。

と考えられる役職名

上記士分の下に、足輕・中間がある。